

両親のしつけ因子と教室における 児童の態度に関する研究

柳生和男 *相賀 直 **小瀬絢子 ***松本浩之

1. 緒 言

小学校児童の学校生活における諸領域は広範囲である。その中心的な柱となるものは授業を中心とした生活、遊びや特別活動における仲間集団を中心とした生活であると考えられる。

しかし、最近では、この柱に係る問題が頻繁に提起されるようになってきている。

低学年児童においては、「授業中の短時間であっても席に座ってられない」「教師の指示に注意を向けることができない」等々の授業への不適応、授業に対する意欲の低下などが学級崩壊を頂点とした一線上の様々な段階に位置していることがあげられる。

また、「友達ができない」「仲間同士のトラブルが絶えない」等々大小いずれの集団にも馴染めずに集団の中で自分の居場所を確立することができない、いわば集団への適応に成功できない児童が増加している。

こうした現象は必ずしも家庭のしつけの不十分さによるものだけでなく、様々な要因が輻輳した結果であることが考えられる。

しかし、学校教育に携わる者としては、保護者の子供に対する養育態度が児童の学校生活の有り様に大きく関わっていることを日常肌身を通して感じていることから教育活動において今後益々家庭の養育が重要であると考ええる。

エリクソンの心理社会的理論(4) (Erikson, 1950,1963) では、低学年児童は、学童前期と呼ばれ、積極性と罪悪感の葛藤を生じ、親や教師などの身近な大人の行動から自分にとって価値あるものを取り入れながら(同一視)自己概念を高めようとする。そこから初期の道徳性の獲得や、集団への適応が図られるのである。

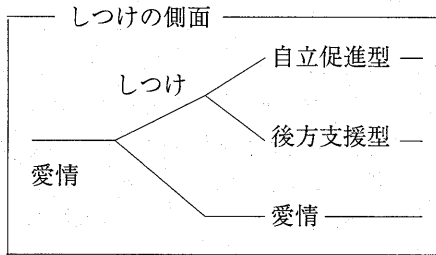
親の養育態度に関する研究では、バウムリンド(1967)が「厳格・監督尺度」「受容・関与尺度」の交わりから4つの養育態度を設定した。ランボーンら(1)(3)(Lamborn, et. al, 1990)は、青年期の学業成績やコンピテンスとの関連を検討した結果、2つの尺度の得点が共に高い親のもとでは、いずれの項目の得点も高かった。また相賀(1999)は幼児期の母親の養育行動について「厳格・監督尺度」「受容・関与尺度」を構成し、基本的な生活習慣、言語・理解面、社会性との関連を見た(5)。その結果、両尺度が高得点の母親の子どもは、他の養育態度の母親の子どもより上記の各側面において高得点であった。三隅(1977)(6)はPM理論において、リーダーシップにはP(パフォーマンス)機能とM(メンテナンス)機能があるとした。養育態度とは異なるが、河村(1997)は教師のリーダーシップ行動の測定尺度を構成し、両機能の強い教師の下では児童のスクールモラルも高いことを示した。

* 東京都立葛飾盲学校

** 目黒区立五本木小学校

*** 千葉県柏市立旭小学校

本研究では、低学年児童の父母の養育態度には大きく分けて愛情深く育てる面と、しつめる面とがあると考えた。愛情深く育てる面とは、乳幼児期に養育者との相互作用によって生じる信頼と不信の葛藤の結果獲得される社会的愛着 (Elikson, 1950, 1963) のことであると考へ、低学年の児童の発達課題からは除いた。



「しつめる」とは社会的自立のための作用として捉えるとともに、しつけの実際、すなわち保護者の実践的な行動様式には主として児童の自立促進を図ろうとする様式、後方支援を行おうとする様式の必ずしも対立しない二種(2)の様式を仮定してその強弱によって、教室における児童の我慢する力、学習に対する意欲、集団に適応する力がどのように関連しているかを調べる。

2. 目的

(1) 研究 I

①「自立促進型」と「後方支援型」のしつけタイプを仮説し、項目を収集し、尺度構成を行なう。

自立促進型しつけとは、主として児童の日常の生活場面に活かした行動様式として達成させるための具体的場面を想定した親の指導姿勢、規範姿勢に関する項目をまとめた。後方支援型のしつけとは小学校に入学する頃になると、家庭生活における自立や、望ましい生活習慣を促すためのしつけの他に、家庭を離れ、学校や児童の遊び集団での活動などがスムーズに運ぶようにするために

家庭内から指導していくことが必要になってくる。

明日の持ち物をしっかり用意させることや、宿題をきちんとやらせて学校に持って行かせることなどがこれにあたる。これらのしつけは、児童が家庭の外で行動するためのお膳立てを家庭内で行うという色彩が強いので、後方支援型しつけとしてまとめた。

②低学年児童の教室における態度について「授業に対する適応性」「授業に対する意欲」「集団への適応性」の3側面から項目を収集し、尺度構成を行う。

(2) 研究 II

①父親・母親の両方に調査を実施して作成した、しつけタイプ尺度項目の「後方支援型」「自立促進型」を父親・母親それぞれ分類し、しつけタイプの特徴を明らかにする。

②家族での父親・母親のタイプ別ペアを児童の態度尺度項目の「授業適応」「授業意欲」「集団適応」との関連を明らかにする。以上の2点を目的とした。

(3) 研究 III

①母親による後方支援型のしつけの強弱が児童の学校における授業適応、授業意欲、集団適応の領域においてどのような関係性があるかについて分析と考察を行う。

②父親による後方支援型のしつけの強弱が児童の学校における授業適応、授業意欲、集団適応の領域においてどのような関係性があるかについて分析と考察を行う。

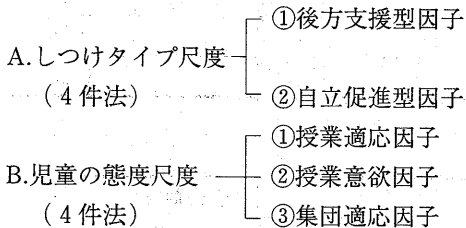
(4) 研究Ⅳ

- ① 父親による自立促進型しつけの強弱が児童の学校における授業適応、授業意欲集団適応の領域においてどのような関係性があるかについて分析と考察を行う。
- ② 母親による自立促進型しつけの強弱が児童の学校における授業適応、授業意欲集団適応の領域においてどのような関係性があるかについて分析と考察を行う。

3. 方法

(1) しつけタイプと児童の教室における態度の調査

- ① 調査方法
 (独立変数) しつけタイプ尺度 (質問紙法)
 (従属変数) 児童の態度尺度 (チェックリスト)
- ② 調査内容



- ③ 調査の対象
 小学校1・2年生児童の保護者及び・担任
 千葉県内の公立小学校2校1年4学級
 2年4学級
 東京都内の公立小学校4校1年4学級
 2年4学級
 計6校 16学級

	父 親	母 親	担 任
1年生	111名	131名	8名
2年生	181名	217名	8名
合計	292名	348名	16名

④ 調査の手続き

調査実施 2001年6月下旬

担任を介して保護者に調査用紙を2枚配布し、父親・母親それぞれが回答後封印後学級

担任を介して回収した。

教室に於ける児童の態度評価は14項目の「担任用チェックリスト」を作成し、学級担任による他者評価とした。

⑤ 有効回収率

父 親	母 親
78.9% (292/370)	94.1% (348/370)

4. 【研究Ⅰ】

両親のしつけタイプ尺度と児童の教室における態度尺度の構成

(1) 結果

- ① 家庭のしつけタイプ尺度の因子分析
 家庭のしつけタイプ尺度の仮説因子
 「後方支援因子」20項目
 「自立促進因子」21項目
 を因子分析 (主因子法) によって尺度の構成を行った。
 41項目について平均値が<2.8, >3.2の17項目および、共通性が0.2未満の9項目を除き、19項目により仮説に従って2因子で因子分析を行なった。バリマックス回転後の因子行列の因子負荷量が、0.3未満の3項目を除き、同様の因子分析を行なったところ、第1因子の固有値は2.55、第2因子の固有値は1.81で、第2因子までの累積寄与率は、27.19%であった。次に、信頼性係数 (α 係数) を算出したところ、第1因子 $\alpha = 0.77$ 、第2因子 $\alpha = 0.67$ となり、十分に信頼できる値であった。さらに教育関係者4名で項目内容についての妥当性を検討した。その結果、仮説どおり第1因子を後方支援型因子、第2因子を自立促進型因子と命名した。(Table. 1)

Table.1家庭におけるしつけタイプ尺度の因子分析

	項 目	因子負荷量	
		第1因子	第2因子
後方支援型因子	学校の宿題をやったかどうか聞き、あとでやったかどうかチェックをする	0.77	
	子供の友達の名前を5人以上知っていて、直接話をしたことがある	0.58	0.16
	学校の保護者会など行事には極力参加している	0.56	0.11
	お小遣いの遣い道についてチェックしている	0.53	0.20
	明日の用意は子供だけでやらせ、やったかどうかあとでチェックをする	0.53	0.13
	子供と一緒に、明日の学校の用意をしてあげる	0.52	
	勉強でわからないところは、多少面倒でもよく教える	0.36	0.27
	学校であったことは細かいことでも報告させる	0.35	0.30
自立促進支援型因子	テレビを見たり、テレビゲームをやったりする時間を何時間以内と決めている		0.52
	食事のマナーは、厳しくしつけている		0.50
	我が家では、絶対してはいけないことが決まっている	0.17	0.46
	子供に家庭内の手伝いをやらせている		0.44
	子供の栄養バランスには気を使っている	0.27	0.42
	食後の歯磨きをやらせている	0.18	0.40
	朝おきる時間、夜寝る時間を決めて、守らせている	0.23	0.38
	子供には食事の好き嫌いをさせない		0.38

Table.2教室における児童の態度尺度の因子分析

	項 目	因子負荷量		
		第1因子	第2因子	第3因子
授業適応因子	授業中友達とおしゃべりをしない	0.84		0.16
	自分の席で落ち着いて授業を受けることができる	0.77	0.22	0.27
	先生の話をしっかり聴くことができる	0.74	0.31	0.32
	始業前に学習用具を出すことができる	0.64	0.45	0.23
	がまん強く物事に取り組むことができる	0.62	0.25	0.39
	責任感が強い	0.59	0.51	0.26
	忘れ物がない	0.50	0.46	0.16
授業意欲因子	授業中よく手を挙げて発表する		0.73	
	挨拶がきちんとできる	0.24	0.60	0.21
	予習復習がきちんとできる	0.37	0.57	0.27
集団適応因子	集団の中で友達と協力できる	0.41	0.28	0.69
	友達の話聞くことができる	0.43	0.24	0.60
	少しのことでかっとなじりいじけたりしない	0.39		0.56
	友達がたくさんいる		0.36	0.50

②教室における児童の態度尺度の因子分析

教室における児童の態度尺度の仮説因子

「授業適応因子」 5項目

「授業意欲因子」 5項目

「集団適応因子」 4項目

を因子分析（主因子法）によって尺度の構成を行った。

仮説3因子の14項目で因子分析を行なったところ、全ての項目について平均値が <2.8 、 >3.2 、共通性が0.3以上、バリマックス回転後の因子負荷量が、0.3以上であった。第1因子の固有値は3.96、第2因子の固有値は1.36、第3因子の固有値は2.02で第3因子までの累積寄与率は、59.55%であった。信頼性係数は第1～3因子で、それぞれ0.92,0.72,0.79と算出された。上記の4名で妥当性の検討を行ない、第1因子「授業適応」第2因子「授業意欲」第3因子「集団適応」で妥当であるとした。(Table. 2)

(2) 考察

①後方支援型因子の各項目をみると、子どもの学校や日常生活での行動（明日の用意、宿題、小遣い、友達関係、学校行事）に親の目配りが効いている様子や、「まず自分でやらせてみる」という子どもの主体性を尊重する様子が現われている。自立促進型因子の各項目をみると、日常生活の規範を示す親像が表されている。いわゆる従来のしつけを連想させる。子どもが内面的規範として身につければ良い効果をもたらすであろう。

②授業適応因子の7項目からは、児童が自らを律して授業に向かう姿勢が連想され、我慢する力＝授業への耐性を表していると言える。授業意欲因子の3項目からは、家庭での準備と授業での挙手が関連していることが示唆され、挨拶という基本的な対人関係作りの力とも関連している。 集団適応の4項目は、集団の中で協力し て活

動できる社会性を表していて、さらに対人関係の中の困難を解決しようとする志向も含まれている。

5. 【研究Ⅱ】

家庭におけるしつけタイプにみる父親、母親の役割の傾向

(1) 結果

①「自立援助型因子」を平均値により高低群に分割し父親・母親に於いてその割合を χ^2 検定によって比較した。

Table. 3 しつけタイプ尺度平均値

型	度数	平均値	標準偏差
後方支援型	586	26.32	5.41
自立促進型	620	27.09	3.72

後方支援型及び自立促進型を平均値により父親・母親をそれぞれ2分割した。父親・母親の後方支援型の高・低群の χ^2 検定の結果、1%水準で有意差が確認された

($\chi^2 = 248.55, df=1, p<.01$)。父親・母親の自立促進型の高・低群 χ^2 検定の結果、1%水準で有意差が確認された ($\chi^2 = 11.2, df=1, p<.001$) (fig.1.2)。

②しつけタイプ尺度を父親の「後方支援型高・低群」「自立援助型高・低群」と母親「後方支援型高・低群」「自立援助型高・低群」を組み合わせて、両親ペア16タイプを設定し、その度数分布表を作成した。両親ペア16タイプと度数分布は次のようであった (Table.4)(Fig.3)。両親ペアの有効件数は228ペアであった。

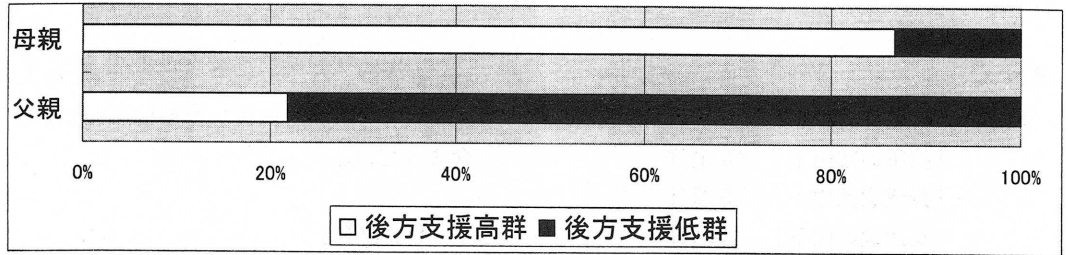


Fig. 1 後方支援型の上位群と下位群

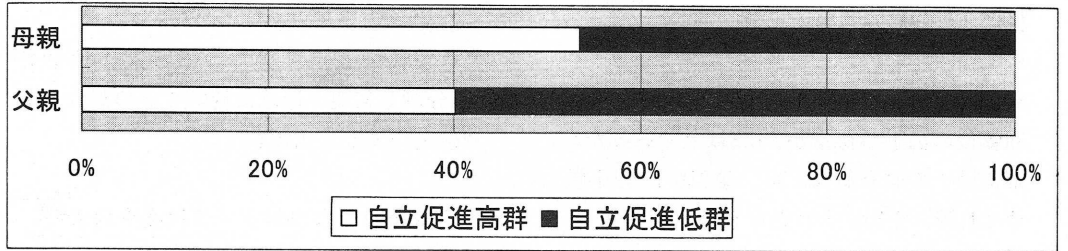


Fig.2 自立促進型の上位群と下位群

Table.4 両親ペア組み合わせタイプ

タイプ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
父親後方支援	高	高	高	高	低	低	低	低	高	高	高	高	低	低	低	低
父親自立促進	高	高	高	高	高	高	高	高	低	低	低	低	低	低	低	低
母親後方支援	高	高	低	高	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低
母親自立促進	高	高	低	低	高	高	低	低	高	高	低	低	高	高	低	低

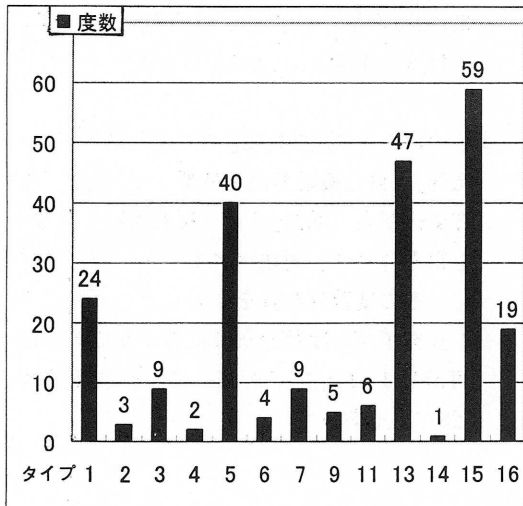


Fig.3 両親のペアタイプ別度数

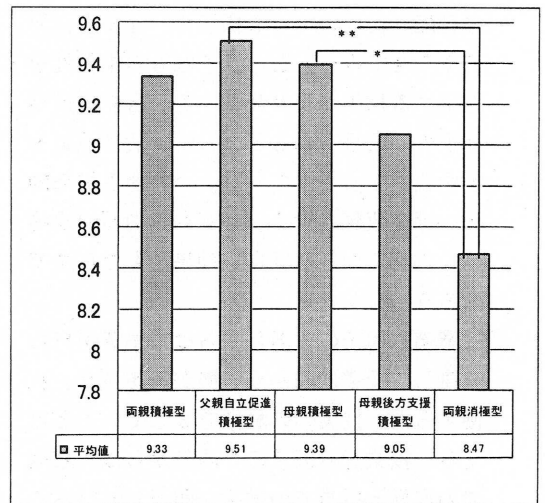


Fig.4 両親のペアタイプと別度数と
児童態度・授業意欲の平均値

③両親ペア16タイプの上位5タイプを独立変数とし、児童の態度尺度を従属変数として分散分析で検討した。

両親ペアの上位5タイプをその特徴から、タイプ15:母親後方支援積極型,タイプ13:母親積極型,タイプ5:父親自立促進積極型,タイプ1:両親積極型,タイプ16:両親消極型とした。更に、その5タイプと児童の態度尺度の授業適応・授業意欲・集団適応の3つの従属変数について分散分析の結果、有意差はみられなかった。

しかし、多重比較においては、授業意欲について父親自立促進積極型 ($p < .05$) と、母親積極型 ($p < .1$) とが両親消極型間に比べ有意に高い傾向がみられた。(Fig. 4)

(2) 考察

- ①後方支援型・自立促進型のいずれも高群の割合が母親の方が高かったことからしつけについては母親主導であり、一方、母親は後方支援型高群、父親は自立促進型高群の方が顕著であることから、しつけには役割分担があることが示唆された。
- ②両親ペアでは1, 2位とも父親の後方支援型及び自立促進型共に低群と母親はいずれも高群との組み合わせである。ここでも、しつけは母親主導であることが顕著にあらわれている。3位は父親自立促進積極型であり役割分担がある家庭である。両親積極型が4位父親不参加と言われる中でかなり多い。
- ③両親が役割分担を行っていたり、母親が2つの役割を演じている場合は、子どもの授業意欲が高得点であることがわかった。両親積極型は、授業意欲について他に比べ有意に高いとは言えないことも興味深い。

6. 【研究Ⅲ】

家庭における後方支援型のしつけにみる教室における児童の態度の傾向

(1) 結果

しつけタイプ尺度の後方支援型因子に関して、父親群と母親群の各々別にして、児童の態度尺度(授業適応、授業意欲、集団適応)をSEX・学年ごとにt検定を実施する。

なお、父親群、母親群についてはTable. 5に示す通り上位群と下位群の2群に分割して分析した。

Table. 5 上位群・下位群分割基準

	父親 (平均値22.3/標準偏差4.9)	母親 (平均値24.8/標準偏差3.0)
上位群	27.2以上	27.8以上
下位群	17.4以下	21.8以下

- ①母親の後方支援型のしつけにみる教室における児童の態度の差違
結果はTable2-1に示す通り、母親の後方支援型の上位群と下位群に女子の授業適応因子に($t = -2.158, df = 31, p < .05$)で有意差が認められた。また女子の授業意欲因子にも($t = -2.202, df = 29, p < .05$)で有意差が認められた。1年生の授業意欲因子についても($t = -3.649, df = 34, p < .05$)で有意差が認められた。(Fig. 5)
- ②父親の後方支援型のしつけにみる教室における児童の態度の差違
結果はTable2-2に示す通り、父親の後方支援型の上位群と下位群に女子の授業適応因子に($t = 2.669, df = 30, p < .05$)で有意差が認められた。(Fig. 6)

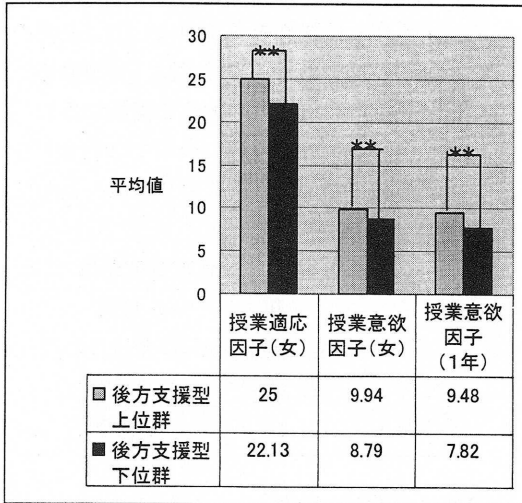
Table.5-1 (母親) 男子/女子/学年

	男子	女子	1年	2年
授業適応		**		
授業意欲		**	**	
集団適応				

Table.5-2 (父親) 男子/女子/学年

	男子	女子	1年	2年
授業適応		**		
授業意欲				
集団適応				

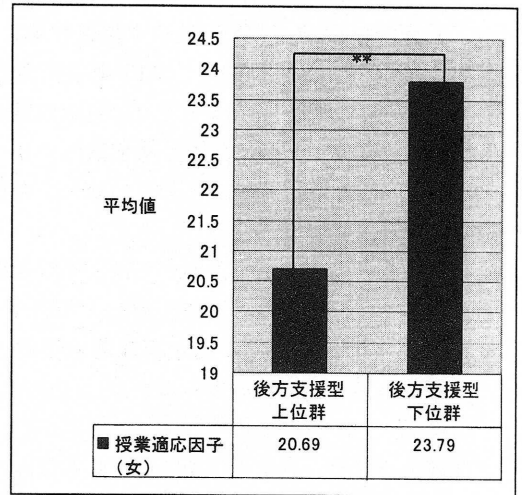
* p<.10 ** p<.05



* p<.10 ** p<.05

Fig.5 母親の後方支援型と女子と1年生の各因子の平均値 (2) 考察

- ①母親の後方支援型しつけが熱心であるほど、女子は、忘れ物をせずに授業の準備をしつかりとして落ち着いて授業に取り組み、よく手を挙げて学習し、予習復習も怠らないという傾向があることがうかがえる。また、母親のこのような熱心なしつけに反応するのは、男子よりは女子であり、2年生よりは1年生であると考えられる。母親が我が子が学校に行き困らないようにと家で細かくしつけても、男子児童にはあまり直接的な効果がないと考えられる。また、後方支援型なしつけの効果は、学校生活が始まったばかりの1年生には現れるが、学校に慣れた2年生では、はっきりしなくなると推察される。
- ②父親の後方支援型しつけが熱心であるほど、女子は、授業適応に関して逆の効果を示すことがわかる。これは、父親が学校の支度



* p<.10 ** p<.05

Fig.6 父親の後方支援型と女子の平均値

など細かいことにいつも口出しすることは、女子にはうるさがられ、授業への好ましい構えの形成に関しては、父親の期待とは逆の行動を引き出すと考えられる。ここに父親のしつけへの関わり方の難しさが現れている。

7. 【研究Ⅳ】

家庭における自立促進型なしつけにみる教室における児童の態度の傾向

(1) 結果

しつけタイプ尺度の自立促進型因子に関して、父親群と母親群の各々別にして、児童の態度尺度(授業適応、授業意欲、集団適応)をSEX・学年ごとにt検定を実施する。

なお、父親群、母親群についてはTable.7に示す通り上位群と下位群の2群に分割して分析した。

Table. 6-1 (母親) 男子/女子/学年

	男子	女子	1年	2年
授業適応			*	
授業意欲				
集団適応				

Table. 6-2 (父親) 男子/女子/学年46,

	男子	女子	1年	2年
授業適応	**	*	*	
授業意欲				
集団適応	*			*

* p<.10 *p<.05

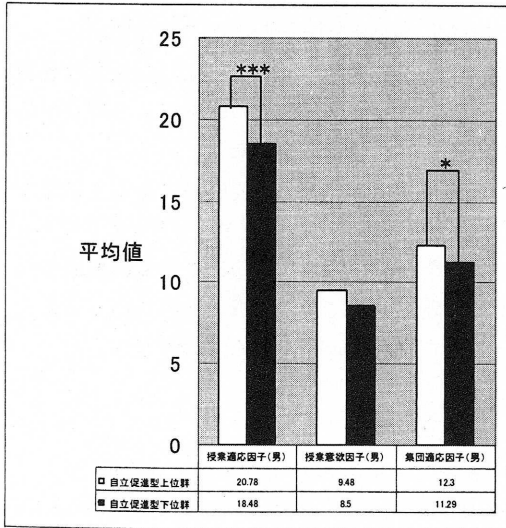


Fig.7 父親の自立促進型と低学年男子の各因子の平均値

Table. 7 上位群・下位群分割基準

	父親	母親
(平均値26.3/標準偏差4.0)(平均値24.9/標準偏差3.0)		
上位群	30.3以上	27.9以上
下位群	22.3以下	21.9以下

結果は、Table 6 に示す通り、母親の自立促進型の上位群と下位群に1年生の授業適応因子に (t=1.91, df=36, p<.10) 有意傾向が認められた。

また、父親の自立促進型の上位群と下位群との間には、男子の授業意欲因子では (t=-2.16, df=35, p<.05) 有意差が、集団適応因子で (t=-1.73, df=39, p<.10) の有意傾向が認められた。

女子においては授業適応で (t=1.83, df=平均値の逆転p<.10) で有意傾向が認められた。

さらに、学年別では、1年生の授業適応因子に (t=1.90, df=33, p<.10) で、2年生の集団適応因子で (t=-1.96, df=52, p<.10) で有意傾向が認められた。

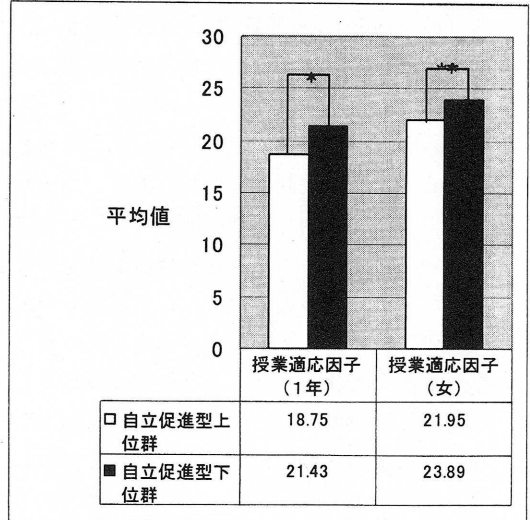


Fig.8 父親の自立促進型と女子及び1年生の平均値の逆転

(2) 考察

分析結果によれば父親と母親、性差、学年差にいくつかの特徴を見出すことができる。

全体的に見れば、独立変数である自立促進型しつけは母親の場合においては顕著な特徴が認められなかったが、父親の場合においては1年生の男子について影響する傾向が認められた。また、父親の場合には女子及び1年生に対してはその傾向が逆転した結果を示した。このことは父親の自立促進型しつけの強さは当該の児童の授業適応及び集団適応について逆効果であることを示唆している。

俗な言い方をすれば父親が生活面での細かいしつけに過度に関わることが発達上のこの時期と女の子に対してはマイナスの要因として働くことが考えられる。

但し、属性間の相違は相互作用の中で発生するものであり、この場合には母親と父親との役割の分化分担、所属する学級の風土等々の要因を排除した上での統計上の現状を説明

するに止まる。

8. 総合考察

本研究を通して、父親と母親の家庭におけるしつけが児童の学校における態度、すなわち「授業適応」「授業意欲」「集団適応」の面で影響が認められるいくつかの部分を確認することができた。

母親の役割は、後方支援型の役割が特化していることや、役割分担においては、母親が自立促進型の役割も同時に演じているケースが多いことから、依然母親主導の家庭が多く見られるという事実を示すものである。本研究での特色である父親の養育態度は自立促進型の役割が特化していることが確認されたがはっきりと役割分担がなされている家庭は少なく、母親も部分的にあるいは父親と同時に自立促進型のしつけをしている家庭が多い。しかし、自立促進型・後方支援型の機能の両方がある家庭はそれらが低い家庭よりも子どもの意欲に良い影響を与えることが確認された。しかしながら、母親、父親共に両機能が低い家庭は必ずしも低学年児童の学級における態度形成に良い結果をもたらすものでない。

後方支援型のしつけの積極性が、子どもの授業意欲や授業適応に良い影響を与えるのは母親の方に特化し、性別や学年といった属性要因によっても差異があることが示された。

一方、自立促進型のしつけの積極性は子どもの授業適応や集団適応に影響を及ぼし、父親の方に特化している。しかし子どもの授業適応に関しては必ずしも良い影響を与えるものではない結果が示され、むしろ母親よりも性別や学年といった属性要因による影響が大きいことが示された。

母親による後方支援型しつけは文字通り支援的なしつけであることから低学年児童、とりわけ女子や1年生の授業意欲に関しては有効であることが考えられる。父親による自立

促進型しつけは規範意識を育てるものであることから授業適応や集団適応に影響を与えることが考えられる。ただし、男子や2年生に関して有効であることがはっきり示された。

今回は、児童の態度評価については各担任による評価を採り入れることで児童の自己評価による曖昧性を排除した反面、各教師の評価基準（主観）のばらつきを排除することができなかったと考えている。

また、本研究では、要因間にある主効果や交互作用についての言及することができなかった。今後は得られた情報による他の要因を加えた分散分析による分析を進めていくことによってさらに研究を深めていきたい。

9. 文献

1. Lamborn, Mounts, Steinberg 1991
Patterns of Competence and Adjustment among Adolescents from Authoritative, Authoritarian, Indulgent and Neglectful Families. *Child Development*, 62, 1049-1065
2. ウィリアムソン『The Fusion of Discipline and Counseling in the Education Process』1955
3. 杉原一昭『現代しつけ考』日本経済新聞社 2000
4. バーバラM. ニューマン/フィリップR. ニューマン 福富 護訳『新版生涯発達心理学』川島書店 1997
5. 相賀 直『母親の養育スタイルが視覚障害のある乳幼児の発達に及ぼす影響』筑波大学大学院修士論文1999
6. 三隅二不二・吉崎静夫・篠原しのぶ『教師のリーダーシップ行動測定尺度の作成とその妥当性の研究』教育心理学研究 1977

(Appendix 1) 保護者用設問項目

◎は因子分析後自立促進型因子として採用した設問項目

●は因子分析後後方支援型因子として採用した設問項目

とてもあてはまる ややあてはまる あまりあてはまらない まったくあてはまらない

- | | | | |
|--|--|---|---|
| | | | |
| 1. おこづかいの使い道についてはチェックしている。 | | ● | |
| 2. テレビを見たり、テレビゲームやったりする時間を何時間以内と決めている。 | | | ◎ |
| 3. 朝、親が起こさなくても自分から起きられるようにしている。 | | | |
| 4. 朝おきる時間、夜寝る時間を決めて守らせている。 | | | ◎ |
| 5. 学校の宿題をやったかどうか聞き、あとでやったかどうかをチェックをする。 | | ● | |
| 6. 我が家では、絶対してはいけないことが決まっている。 | | | ◎ |
| 7. 遊びから帰宅する時間を厳しく守らせている。 | | | |
| 8. 必要に応じて子供をたたくことがある。 | | | |
| 9. 子供の欲しがるものは、親の判断で買うか買わないか決める。 | | | |
| 10. 食事のマナーは、厳しくしつけている。 | | | ◎ |
| 11. 食後の歯磨きをやらせている。 | | | ◎ |
| 12. 子供に家庭内の手伝いをやらせている。 | | | ◎ |
| 13. 子供のしつけは理屈よりも、体で覚えることも大切だと考える。 | | | |
| 14. 明日の用意は子供だけでやらせ、やったかどうかあとでチェックをする。 | | ● | |
| 15. 多少のいたずらでも、人に迷惑をかけることは許さない。 | | | |
| 16. 朝起きたときには、子供が自分から「おはよう」といえるようにしつけている。 | | | |
| 17. 好ましくない子とはそれとなく遊ばせないようにしている。 | | | |
| 18. 子供の帰宅が遅いと大変心配する。 | | | |
| 19. 時々厳しく叱ることがある。 | | | |
| 20. 子供には食事の好き嫌いをさせない。 | | | ◎ |
| 21. 学校であったことは、細かいことでも報告させる。 | | ● | |
| 22. 学校の話やうなずきながら聞いてあげる。 | | | |
| 23. お小遣いをあげて子供の喜ぶ顔を見るのが好きだ。 | | | |
| 24. 朝食は、毎日子供のために用意している。 | | | |
| 25. 休日は、子供と遊ぶ時間を設けるようにしている。 | | | |
| 26. 学校の保護者会など行事には極力参加している。 | | ● | |
| 27. 勉強で分からないことは、多少面倒でも良く教える。 | | ● | |
| 28. 子供がよいことをしたときには誉めるようにしている。 | | | |
| 29. 子供と一緒に風呂にゆっくりと入る。 | | | |
| 30. 多少行儀が悪くても、何でも食べるように励ます。 | | | |
| 31. 食事は子供と一緒に食べる。 | | | |
| 32. 休日は、子供と一緒に食事の支度をすることがある。 | | | |
| 33. 子供の言ったことは、まず受け入れてあげることが大切だと思う。 | | | |
| 34. 子供と一緒に、明日の学校の用意をしてあげる。 | | ● | |
| 35. 多少のいたずらをしても許している。 | | | |
| 36. 我が子は目の中に入れても痛くないぐらいに思っている。 | | | |
| 37. 朝起きたときには、親から「おはよう」の声をかけるようにしている。 | | | |
| 38. 子供の友達の名前を5人以上知っていて、直接話をしたことがある。 | | ● | |
| 39. どこにいても子供のことを気にかけている。 | | | |
| 40. 子供の栄養バランスには気を使っている。 | | | ◎ |
| 41. 子供が抱きついてきたときには、やさしく受け止めてあげる。 | | | |

(Appendix 2) 担任用チェックリスト項目

達成されていない やや達成されていない やや達成されている 達成されている



1. 先生の話をしっかり聞くことができる
2. 我慢強く物事に取り組むことができる
3. 自分の席で落ち着いて授業をうけることができる
4. 授業中、友達とおしゃべりをしない
5. 少しのことでかっしたり、いじけたりしない
6. 友達がたくさんいる
7. 友達の話を聞くことができる
8. 集団の中で友達と協力できる
9. 責任感が強い
10. あいさつがきちんとできる
11. 始業前に学習用具を出すことができる
12. 忘れ物がない
13. 授業中よく手をあげて発表する
14. 予習、復習がきちんとできる
15. ノート整理がきちんとできる